

羽文雄文学全集 第十七卷
日日の背信

講談社



丹羽文雄文学全集 第十七卷

日日の背信

一九七四年七月八日 第一刷発行

著者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二・郵便番号 一一二
電話 東京〇三三九四五一一二（大代表）・振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社小島製本所

定価は箱に表示してあります

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
©丹羽文雄 一九七四年 Printed in Japan

(文1)

目次

創作ノート……………387

彷徨……………331

架橋……………303

日日の背信……………7

装幀・辻村益朗

（写真・一九四八年、十返齋結婚式の丹羽夫妻）

丹羽文雄文学全集 第十七卷

日日の背信

日
日
の
背
信

水音

湯元からあふれる水音が、枕の下をはしった。細くもならず、太くもならず流れているが、昼間は気がつかない。夜、そこにはいると、にわかには訝え訝えとひびいた。桜と孟宗竹と杉の木立にかこまれた温泉宿が、いかにも深山を思わせる。土居広之は、この水音になれていた。この音をきかなければ、温泉にきている気がしなかった。この水音は、土居の両親もききなれていた。妻も聞いている。妻の知子は、最初の夜、そのためねそびれてしまったという。ねそびれたのは、そのせいばかりではなかったようである。夫妻にとつては、この旅館の、このはなれは、蜜月旅行の第一夜をおくったところである。水音には、土居家の味わたつた情緒の記念がきざみこまれている。

水音が、土居家の物音の延長というのでは、ぜいたくな誇張になるかもしれない。が、心理的にも、感覚的にも土居にはなじみふかいのだった。受持の女中も五、六年のな

じみであり、旅館ではいちばん年かきの女中が番をもつことになつていた。両親のことも妻のことも、女中はくわしく知っている。あんまといえは、両親のからだをもんだ女あんまがやつてくる。土居は枕の下をはしる水音に、うとうとなつた。このはなれは、二タ組の客のために建てられていて、おもやから完全にはなれてゐた。団体客が広間でどのようなさわざをおこそうと、こままではひびいてこなかった。旅館でも、はなれは、なじみの客以外にはつかわれない。はなれ用の浴室、はなれ用のトイレット、それにひとりの女中のたまりの間。用がすめば、女中は女中部屋にひきあげてしまう。となりの客のない夜、土居はふかい木立にかこまれた静かなはなれで、ひとりぼっちになつた。深夜、夜まわりが足音をしのばせて上がつてくる。風呂番が足音をしのばせて、浴室のようをしらべにくる。あととは、水音と、風が木立をわたるのを聞いているだけであつた。

「ごめん下さいませ」

男の声がした。土居は、錯覚のように聞いた。階段に何の気配も感じなかつたからである。或いは、水音を人の声とききちがえたのかもしれない。深夜である。

「ごめん下さいませ」

となりにも客があつた。その客は夕飯、ときから一度も部屋にもどらなかつた。仲間と取引があり、ひきつづき取引

が広間で行われていると女中はいった。土居がそこにつくまでは、となりは静かであった。すでに、となりはもどつていたのか。気がつかなかったとすれば、自分は眠っていたようである。

「ごめん下さいませ」

あたりをはばかりる声である。それは、廊下から土居の部屋のふみこみに顔を近づけて発する声のようであった。

男の声は、若くなかった。深夜にきく抑揚のない声は、不気味である。旅館の人の声には、ある共通したものがあつた。客に対する一定の距離が、一段と明るい調子となつて声の中にふくまれている。たとえ土居が一度も口をきいたことのない女中や男衆にしても、声の調子でそれとわかるものである。いまごろ、旅館はたれも起きていないのだ。土居はとこに起きあがり、しばらくようすをうかがつた。

「ごめん下さいませ」

あやしい訪れ方である。二度も三度も案内を乞う間には、一度ぐらゐは客の名をよんでもよかった。男の声は、客の睡眠を気がねしている。が、どうしても起きてもらわなくてはならないと、きめてかかつていた。男は、部屋の気配に耳をすましているらしい。

「たれだ」

しかし、男の返事はなかった。

「ぼくに用か」

その時になつて土居は、東京の留守宅になにかおこつたのではないかと気がついた。妻の病気の急変か。十分ありうることであつた。その危険は、いつも感じている。急変に処する覚悟は、日日すこしずつ準備しているといつてもよかつた。土居は、襖をあけた。急変にしては、深夜の男はいやに落着いているではないか。そして、ふみこみの障子をあけた。六十ちかい、一見して客ではない、もつさりとした男が、ふみこみの格子の外で頭を下げた。

「お客さまは、こういう方ではございませんか」

格子の間から、一枚の名刺をさしだした。旅館の玄関にいる寝ずの番人だつた。土居は、名刺をうけとつた。宝右商春日堂と肩書があり、六角庫吉、住所、電話番号が小さく印刷されている。

「ぼくは、ちがうよ。しかし、この名刺は、どうしたんだ」

「その名刺をもつて、ご婦人の方がおふたり、玄関においてになりました」

「いま時分？」

「はい、自動車で東京からおつきになりました」

ただものではないな。深夜の東海道を車をはしらせてきたふたりの女性に、土居は興味をおぼえた。すると、この名刺の客は、そういう女性を相手にしている、これもただ

ものでないということになる。土居はちょっと羨望に似たものを感じた。自分の領分でなかったことが、残念だった。

「はなれのお客さまときいてましたので……」

「それじゃ、おとなりさんだろう」

「おとなりは、まだお戻りになっていません。広間におあつまりです」

「広間へいって、きいてごらん。この名刺の六角というひとは、多分そこにいるだろう」

名刺を返した。ねずの番の老人には、帳場のことがよく通じていなかったものらしい。

再びどこにもどった土居の頭は、先ほどの名刺がちらちらした。春日堂という宝石商は、知らなかった。春日堂は、銀座裏に店をもっている。六角庫吉なるものに、興味をもった。深夜の東京からふたりの女性をよびよせるほどの男性である。それにしても、名刺がすこしおかしかった。使い古された名刺であったことだ。角がつぶれていて、変色さえしていた。名刺は、皺になっていた。昨日や今日ももらったものとは思えない。雑誌の間にはさんだり、引出しに入れわすれていたという扱いではなさそうである。その名刺をもらった女は、たえずハンドバッグに入れていたものらしい。それとも、帯の間にはさんでいたものか。名刺の皺の工合は、そうではないかと思わせたが、角

のつぶれ方と変色は、そうともうけとれなかった。ハンドバッグに入れていて、コンパクトやら、口紅やら、鏡やら、小銭やら、映画の切符やら、ハンカチやら、鍵やら、手紙やら、小菊紙から、櫛やら、ホルモン剤の小壘やら、手帳やらの、チグハグな、ごたごたした出入りの間に、いつか皺になり、角がつぶれ、変色したのであるまいか。名刺のまわりでいろんなことが行われてきたといった感じであった。

「六角さん、おとまりでしょう」

と、玄関に立った時、老人のねずの番人が、うさんくさい表情をみせたので、女客は身のあかしをたてる必要が生じたのであろう。六角庫吉の名刺をもっていたことを思いだした。ハンドバッグをかきまわして、番人につきつけた。それでもって、深夜にもかかわらず、六角庫吉をたずねてきた機縁のあることを証明したつもりであったろう。土居の想像力が、とめどなく展開する。枕の下をはしる水音をわすれた。いずれ、まともな関係ではあるまい。夜を職場とする種類の女か。すると、六角庫吉なる男は、温泉場を取引の場にしたり、享楽の場にする、なかなかのやり手ではないのか。となりの客が、はたして六角庫吉か。どんな男だろうか。土居は、ふと、自分がいやになった。快楽をもとめる六角庫吉をほしのままに想像する自分に、気がさした。自分が六角に似かよっていると形容すること

は、いいすぎであるにしても、聖者や高德の存在をひき合
いにだす場合、自分にはっきりと六角庫吉側の人間である
と思われたからである。

階段に、どやどやと足音が上ってきた。深夜の時間が、
逆にまわりはじめた。女客の声が出た。それにまじって、
女中の声が聞える。眠っていた女中は、たたき起こされた
ものにちがいない。女客はふたり、となりの部屋にはいっ
てからも、高い声で笑い合った。東海道の深夜を二時間の
余はしりつづけた興奮が、いまだに残っている。そんなこ
とは、女客にも経験のすくないことだろう。女中の声は、
ひかえめであった。女中は、土居の眠りを気にしている。

何を話しているのか、話の内容はよくわからなかった
が、明るい声の調子がつたわってくる。障子も襖もあけっ
放しにして喋っているのであろう。明るい声の調子から想
像すると、二十五、六の女性である。瘦せた女の声ではな
かった。くったくがなくて、深夜であることを忘れている。
となり客のあることも念頭においていない。土居は無視
されて、睡眠のじゃまをされて、むしろ小気味のよさを感じ
た。が、女中には同情をした。おそらく六角庫吉は、夜
おそく東京から女がくることを、女中に話してはいなかつ
たろう。つたえてあれば、いくらおそくなろうと、女中は
起きて待っているのだ。はなれにはいるほどの客であり、
旅館も六角庫吉を上客として扱っている。土居はこの中

で、ふたりの女性を、その声と発音から、興味をもって想
像した。

やがて、女客は浴室にはいった。浴室は、あいにく土居
の部屋の洗面所のすぐそばの位置にあった。湯が熱すぎ
た。たちまち水道の水のほとばしる音がした。洗ひ桶のこ
るがる音がする。のべつにお喋りをやっている。一段と明
るい声になった。浴室は天井までタイル張りであり、明る
すぎた。澄明な温泉と、白いタイルが四方から反射しあつ
て、白日のもとに裸体がひきだされたほどの気まりわるさ
を覚えさせる。声のようすから推察すると、浴室の窓があ
いている。全部があいていなくとも、二つぐらいいは開いて
いる。窓は、山に接していた。光りのとどくところに、孟
宗竹があり、杉の木立があった。いま時分、山を歩いてい
る人間はいない。しかし、深夜の湯殿に、若い女がふた
り、傍若無人にふるまっている光景は、ちょっと異様であ
る。土居も時々、眠れないために、深夜の浴室にはいるこ
とがあった。窓が開放されていると、不気味であった。夜
の山の神秘が、不安を感じさせる。透きとおった湯面に、
枯れた竹の葉が浮いていることがあった。

女同士の話し方は、馴れ馴れしくて、姉妹のように親し
い同輩を連想させた。まさか、姉妹とは思われなかった。
白い、心持ちふとった、若々しい肉体が、石鹸の泡をとば
し、惜しげもなく湯をつかい、ひっきりなしにお喋りをや

っている。声はタイルの天井につきあたり、明るい浴室いっばいにこだました。いづれ、堅気の女ではあるまいが、その中のひとりが六角庫吉の情人ということになる。今夜は三人で一室に眠るのだ。六角とすれば、自分の女がよけいなこぶをつれてきたことになる。迷惑せんばんであらう。そこにどんな隠微な会話や表情が、とりかわされることか。ひとごとながら、土居には興味がわく。女たちの湯は、ながかった。

階段に、だるそうな足音がのぼってきた。男の足音である。階段を上がりきると、「ああ」と溜息をついた。六角庫吉かな。女ふたりの来襲に当惑して、はらをたてているのではあるまいか。女中のでまえ、照れくさいだらう。土居は、六角庫吉の胸の中にはいった。男の足音が、となりの格子戸に達すると、

「非常識な連中だ。こんなおそい時間に来る奴があるか」
それに対して、返事は聞えなかった。浴室では、湯をあびている音がしている。相手は、女中だった。

「気の毒だったね、ねてるところを起こされて」

その後の男の声は、聞えなかった。土居は苦笑した。女中のでまえ女たちを非難したが、そのことばの中には、しんからはらをたてている風は感じられなかった。女の非常識を、こっそりとよるこんでいる。六角庫吉がこの温泉旅館にきていることを、女たちは知っていた。六角が誘った

ものかもしれない。が、あてにはしていなかったのだらう。女たちは、まったくの自由意志からやってきた。そうだとすれば、むしろ六角の気に入らないわけではない。

「おやすみなさいませ」

廊下に出て挨拶をする女中の声してから、やがて階段に足音をころして、下りていった。女のひとりが、部屋にもどってきた。男と女の会話はじまったが、土居は聞きとるわけにかなかった。男が非常識を叱りつけるようすも感じられない。十畳の間には、足のふみどころもないほどいっばいに、三つのとこが敷かれていることだらう。あとの女が、湯から上がってきた。三人になると、にわかに会話が活潑になった。笑声がおこった。非常識をたしなめるどころか、六角が先に立って、女たちの非常識を歓迎している。土居は、ばかばかしくなった。この調子では、うっかりすると、ねそびれてしまう。土居は、ねがえりをうち、眠ることにした。が、器用に眠ることはできなかった。眠れない時は、ぬるい湯にはいることにしている。が、女たちのはいったすぐあとの浴槽にはいる気にはなれない。湯をとりかえるには、三十分はかかるのだ。そんな時間を、この真夜中にすごすわけにはいかなかった。土居の耳に、ようやく水音が流れるようになった。いつか、となりは静かになった。三人もどこについたようである。水音だけを感じられるようになれば、眠られる前まで

ある。つまり水音以外の物音や、懸念や、妄想から解放されることを意味している。先ほどまでおちいっていた下劣な想像の状態から、脱出ができるのだ。水音をきいている間に、土居は眠った。が、その眠りはあさかった。どれだけ眠っていたのだろうか。

突然、格子戸が乱暴にあげられて、たれか浴室にとびこむ物音が起った。土居は、再び目をさました。その物音のあとから、またたれかが部屋を出た。その足音は、トイレットにはいった。

浴室の主は、どうやら六角庫吉のようである。湯のあび方が、乱暴を極める。何かからだに付いた不快なものを、いそいで洗い流そうとしている。土居は、はらをたてた。山の中の一軒家じゃあるまいし、すこしは時間を考えろ。どのような面をした男か、見てやりたくなかった。土居は、そこをでた。ふみこみのところの障子を細目にあけて、戻っていく六角庫吉を待ちうけることにした。灯は消えているから、廊下からこちらの部屋のもようはわからない。すると、目の前のトイレットから、女があらわれた。女を待ちうけていたわけではなかったので、土居は虚をつかれて、どきんとなった。二十四、五の、すこし肥り気味の、髪が多い女であった。宿の浴衣をきている。女は廊下でいると、立ちどまり、あたりを見まわした。あたりのようすをうかがうといった表情であった。細目に障子のあいてい

る土居の方を眺めた。くらがりにたらずんでいる土居を発見したものか、ちょっと視線を固定させた。土居は、身動きもならなかった。ぬすみ見している下劣さを指摘されたように、ひるんだ。が、女の目に土居が映ったわけではなかった。となりの部屋の障子が細目にあいているのを、軽く不審に思った程度である。女は目が大きく、からだのわりには顔が大きかった。頸の白さが、印象的であった。女は、あたりの気配をうかがっていたわけではなかった。陣容をたてなおす必要があったからだ。部屋にもどるために、襟をかき合わすといった程度のことだった。女が部屋にはいる。

「なにさ」

いきなりそういった女の声が聞えた。前後の事情はわからない。その声は、とがめるような、照れくささをこまかすような、一挙に相手の口を封じる調子であった。高飛車であった。もうひとりの女が、何かいったのだらうか。それに対して、トイレットからもどった女が、あびせかけたものである。土居は、気をまわした。女の声が不意をつかれたようにも聞えたからである。もうひとりの女が眠っているものと思つて、女は静かに部屋にはいった。眠っていたはずの女が、ぱっちり目をあけて、もどってきた女を迎えた。となりはいつとき静かになっていたのだから、三人は既に眠っていたはずである。六角庫吉と情人は、もうひ